

佐々井秀嶺の思想と実践から立ち上がる生き方

インドのマハラシュトラ州ナーグプール市において

「不可触民」解放運動に取り組む仏教徒たちとともに生きる日本人仏教僧

根本達 (筑波大学人文社会科学研究所)

インドのマハラシュトラ州ナーグプール市において、仏教徒たちによる「不可触民」解放運動が行われている。この社会運動を始めたのは、「不可触民の父」と呼ばれるB・R・アンベードカル(1891-1956)である。アンベードカルは、1920年代から「不可触民」解放運動を開始し、1956年10月14日、ナーグプール市において、マハール・カーストを中心に、30万人以上とされる「不可触民」とともに仏教へ集団改宗した。アンベードカルの死後も、仏教徒たちは、ナーグプール市を中心として、彼の教えに基づき、ヒンドゥー教から仏教への改宗により被差別状況から脱することを旨とした「不可触民」解放運動に取り組んでいる。そして、1968年、竜樹菩薩(150-250)から使命を受けた佐々井秀嶺(1935-)がナーグプール市に登場し、現在に至るまで、「不可触民」解放運動の重要な指導者として活動している。

アンベードカルの教えの特徴は、「迷信と差別のヒンドゥー教」と「平等と科学の仏教」を二元論的に配置する認識枠組みとともに、インドの歴史を「ヒンドゥー教(上位カースト)対仏教(不可触民)の歴史」とする歴史観にある。ナーグプール市において、このアンベードカルの教えは、1930年代後半以降、現在に至るまで、アンベードカルの著作や仏教徒活動家の演説などを通じて仏教徒の間に流布されている。仏教徒たちは、アンベードカルの教えを通じて、自分が受けた差別の経験の「理由」を発見し、差別意識を有する上位カーストとの関係における個別的な経験を、脱文脈化された一般的な経験へ再解釈する。これにより、固有名詞を有する自己と他者は、「被差別状況にある不可触民」と「差別をするヒンドゥー教徒」という普通名詞の中に再配置され、「被差別状況にある不可触民」である自らは、「差別と迷信のヒンドゥー教徒」と闘争すべき「平等と科学の仏教徒」へ変換される。

一方、仏教徒たちの中には、ブッダやアンベードカルの像を居間などに置く一方、ヒンドゥー教の神々を家の奥に隠し、礼拝を続けている仏教徒がおり、「半仏教徒・半ヒンドゥー教徒」と呼ばれている。「半仏教徒・半ヒンドゥー教徒」の仏教徒青年たちは、アンベードカルの教えがヒンドゥー教を否定していることを知っているため、ヒンドゥー教儀礼を脱カテゴリー化することにより、仏教徒がヒンドゥー教の儀礼に参加することを正当化している。例えば、クリシュナ生誕祭においてクリシュナの神話を模倣するダヒ・ハンディの儀礼が行われるが、仏教徒青年たちは、雄牛の祭りにダヒ・ハンディの儀礼を行なっている。これにより、仏教徒青年たちは、ヒンドゥー教の儀礼から「ヒンドゥー教」というラベルを外し、「どの宗教にも属さない儀礼」を創出している。そして、仏教徒青年たちは、「名前や物語のない神」から祝福を引き出し、家族や近隣で暮らしている人々に分け与えている。

これに対し、仏教徒活動家たちは、アンベードカルの教えに従い、超自然的な神の力を否定するため、「半仏教徒・半ヒンドゥー教徒」の祭壇からヒンドゥー教の神々や聖人を回収し、焼却する取り組みを行ない、また、改宗記念日の祝祭において、仏教徒に巻かれたヒンドゥー教の聖紐やラキの紐を「迷信」であるとして切り取る活動を行っている。仏教徒活動家によると、「半仏教徒・半ヒンドゥー教徒」が他宗教の神々を信仰する理由は、病気や貧困に苦しんでいることにある。つまり、アンベードカルの教えは、上位カーストに否定的表象を付与し、「他者」として創出・排除するものであったが、仏教徒活動家たちは、病気や貧困によって困難な状況にある人々に「半仏教徒・半ヒンドゥー教徒」という否定的表象を付与し、「内部の他者」として創出・排除し、自らの差別に抗するアイデンティティを確立している。

佐々井の思想と実践は、アンベードカルの教えと完全に重なるものではなく、オルターナティブな在り方を提示している。佐々井は、現実世界を、「差別即平等、平等即差別」ととらえ、「差別の側面を見れば平等が現れ、平等の側面に目を向ければ差別が現れる」とし、「差別に抗する闘争と差別する者も受け入れる平等を徹底すべき」とする。佐々井は、現実世界の差別の側面に目を向け、アンベードカルの教えを基盤として、差別する側に対して自己犠牲による闘争を行なうとともに、現実世界の平等の側面から、祝福の儀礼において、それぞれの宗教の境界だけでなく、自他の境界を乗り越え、差別する側を含めて全ての弱者を自らとして受容している。この時、犯罪や病気や貧困に苦しむ人々は、「半仏教徒・半ヒンドゥー教徒」として排除の対象になるのではなく、祝福の儀礼における救いの対象となる。これが佐々井の思想と実践であり、差別に抗する社会運動のみを生きるのではなく、矛盾した現実世界そのものを生きるオルターナティブな在り方である。

【インド、「不可触民」解放運動、アンベードカル、佐々井秀嶺、仏教徒】